

新生児の感染症に関する研究

総括報告書

分担研究者 柴田 隆

研究目的

新生児、殊に未熟児は感染症に罹患し易く、ふるくから未熟児医療の三大原則の一つとして感染予防がとり挙げられてきた。新生児・未熟児医療の進歩した今日においても、感染症対策は重要な課題の一つであり、未だ多くの残された 題が存在する。昨年度までは奥山教授を分担研究者として新生児期・周産期の感染症に関する研究として、研究が進められ多大の研究成果が挙げられたが、解決をみなかった点も存在する。本年度からは、新生児期の感染症に的をしぼり、研究を続行することになった。

出生を転機としての適応過程にある、新生児期の適応生理・病態生理が解明され、瀕死の状態にある重症児にたいしても、理にかなった呼吸循環の管理を中心にした医療が行えるようになった。このような医療を行う場である、NICUでは、長期にわたり intensive care を必要とすることがあるが、このような場合には、母子相互作用の問題を含めて、特に感染症に対する配慮が重要となる。また新生児期の感染症では、早期診断の下に、適切な抗生剤の投与、あるいは免疫療法が重視される。

産道における感染症についても、多岐に亘る問題が存在する。さらには、新生児のウイルス感染症、中でもエンテロウイルス感染症が最も多く、その対策が重要である。

本年度からは、これらの問題に関して研究を進めることとした。

研究結果

各々の研究協力者の研究結果は、その報告書にゆだねる事として、ここではその概略を述べるにとどめたい。

1) 新生児感染症の迅速診断法の確立に関する研究；

後藤（名古屋市立城北病院）は、従来から行っている APR-Sc について、さらに研究をすすめ、Latex 凝集を利用した APR-Sc の迅速診断法の確立を試みた。新生児感染症の早期診断の重要性から結果の判定までに、24時間を必要とした従来の方法の改良を行い、検体の前処理の検討を含め充分な、準備が整えば、Bed side で数分後に、その結果を判定可能な方法を考案し検討を加えている。

2) 新生児のエンテロウイルス感染症に関する研究；

鳥居（北野病院）は、エンテロウイルスが新生児中枢神経系ウイルス感染症の病因として重要であることを、昨年度までに報告している。

今年度は、このエンテロウイルス感染症に焦点をあて、これらのウイルス学的・血清学的に確認がなされた例について、早期診断のために、種々な角度から臨床的な検討を加え報告しているが、今後の課題としては、早期診断の為のウイルス学的な診断手法の開発の重要性を提起している。

3) 新生児感染症の治療に関する発達薬理学的研究

吉岡（旭川医大）は、本研究課題の一環として新生児感染症の中でも、最も重篤な経過を辿る、新生児壊死性腸炎を挙げ上げた。新生児壊死性腸炎の予防の一つとして、Gentamicin の内服による腸内細菌叢の変動を検討し、広く抗生物質投与方法確立の為の基礎的研究とした。

4) 新生児感染症の免疫学的治療に関する研究；

岩瀬（関西医大）は、新生児の好中球走化能および付着能の新しい測定法として⁵¹Cr標識法の確立を行うとともに、本方法によって、新生児の好中球の機能評価を行い検討を加えた。これらの研究結果と、新生児細菌感染症に対する免疫学的治療との相関性について報告した。

5) 新生児の経産道感染症の諸問題に関する研究；

関（鹿児島市立病院）は、経産道感染の内、近年注目されているクラミディア感染症を挙げた。新生児クラミディア肺炎症例の検討を行い、今後の問題点を指摘した。

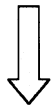
6) NICUにおける母子相互作用を中心とした感染予防対策に関する研究；

中嶋（都立豊島病院）は、母子相互作用の面から家族の入室面会によるNICU内での細菌感染症発症増加の有無について、調査し報告するとともに、家族の入室面会を希望する状況、入室面会を希望する家族の健康状態をアンケートによって調べた結果を報告し、今後の問題点を提起した。

7) NICUにおける施設・設備を中心とした感染予防対策に関する研究；

柴田（順天堂大伊豆長岡）は、NICUにおける感染予防対策として、現状のNICUの室内浮遊塵埃の測定、室内落下菌の測定による室内の生物粒子沈降量の検討、さらにNICU内の床面壁面の付着菌を測定し、現状におけるNICUの施設・設備面からの基準作成の試みの一つとして報告した。

今年度は、各研究協力者の協力を得て概略以上の様に研究を進めることができた。次年度以降も本研究を継続し、不幸にしてNICUに入院しなければならない、重篤な病態にある新生児の、感染予防対策の確立を計るとともに、感染症に罹患した児に対しては、最善の治療法の確立を計ることを期するものである。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



研究目的

新生児,殊に未熟児は感染症に罹患し易く,ふるくから未熟児医療の三大原則の一つとして感染予防がとり挙げられてきた。新生児・未熟児医療の進歩した今日においても,感染症対策は重要な課題の一つであり,未だ多くの残された 題が存在する。昨年度までは奥山教授を分担研究者として新生児期・周産期の感染症に関する研究として,研究が進められ多大の研究成果が挙げられたが,解決をみなかった点も存在する。本年度からは,新生児期の感染症に的をしぼり,研究を続行することになった。

出生を転機としての適応過程にある,新生児期の適応生理・病態生理が解明され,瀕死の状態にある重症児にたいしても,理にかなった呼吸循環の管理を中心にした医療が行えるようになった。このような医療を行う場である,NICU では,長期にわたり intensive care を必要とすることがあるが,このような場合には,母子相互作用の問題を含めて,特に感染症に対する配慮が重要となる。また新生児期の感染症では,早期診断の下に,適切な抗生剤の投与,あるいは免疫療法が重視される。

産道における感染症についても,多岐に亘る問題が存在する。さらには,新生児のウイルス感染症,中でもエンテロウイルス感染症が最も多く,その対策が重要である。

本年度からは,これらの問題に関して研究を進めることとした。